

広島県N I E公開セミナー（兼第115回広島県N I E学習会）

テーマ 被爆体験の継承を考える～はがき新聞の作成を通して～

日時： 令和7年12月7日(日) 13:30～16:30

会場： 中国新聞ビル

参加者:40 名

第1部【講話】 「あの日を、わたしは忘れない」

講師

被爆体験証言者

河野 キヨ美 さん



1931 年、広島市旧高田郡市川村(現広島市安佐北区)生まれる。1945 年 8 月 7 日、女学校 2 年生の時、入市被爆。その記憶を「原爆の絵」に描き、絵本『あの日を、わたしは忘れない』(勉誠社)を出版。2003 年から中学生に被爆体験証言を行う。

2011 年に米国ミズーリ州で、2013 年に、ワシントン州、オレゴン州、ニューメキシコ州で、大学、高校、中学校にて証言を行った。

2025 年、8 月 6 日 原爆資料館で平和記念式典に参加した各国の大使をはじめ、20以上の国の関係者などおよそ150人にみずからの体験を語った。

【講話内容】

「いくら年を取っても、忘れたくても忘れられない」。河野キヨ美さんは 80 年前に見た記憶を静かに話し始めました。原爆投下の翌日に訪れた広島赤十字病院（現在の広島赤十字・原爆病院）で、円形の花壇に中学生たちの死体が放射状に積まれていました。「木材のように投げてあった」。その衝撃の光景を 1 枚の絵に描き残しました。

河野さんは当時、14 歳の女学生で、高田郡市川村（現広島市安佐北区）に暮らしていました。学校では、集められたミシンで兵隊のシャツを縫ったり、なぎなたの訓練をしたりしていました。「今思えば馬鹿なことをしていたと思うが、鉢巻をした軍国少女だった」と振り返ります。

そして、「あの日」を迎えます。

「静かな朝だった。突然、近くで『ドカン！』と聞いたこともないような爆発音がした」。すぐさま外に飛び出しましたが、何も変わりありません。ふと見ると、広島の方角の山々から音もなく雲が沸き上がってきました。原子爆弾のキノコ雲でした。

翌日、母とともに 2 人の姉を探しに広島市内に向かいました。広島駅の一つ手前、矢野駅のホームに降り立つと、ものすごい悪臭に襲われました。家々が消え、目前には真っ黒い平野が広がるだけ。「鮮やかな緑の似島が遠くに見えたのが、深く印象に残った」

市街には、焼け焦げて男女の区別もつかず、目玉や内臓が流れ出て赤くふくらんだ死

体があちらこちらに。「人生で一番怖かった」。ようやく姉たちの無事を確認し、帰路につきました。「最後は何も感じなくなって、どうやって家に帰ったのか、覚えていない」。少女時代に体験したショックの大きさがうかがえます。

75年間草木も生えないといわれた広島は、今、豊かな街になりました。しかし、ウクライナに侵攻したロシアが核兵器をちらつかせたなど、河野さんには、世界は自分の思いとは逆行しているようにみえています。

「被爆国の日本には、核兵器廃絶と戦争の愚かさを伝えていく義務がある。心のうちに平和の灯をともし続け、戦争は絶対にダメだと思い続けてほしい」。私たちは大きなバトンを受け継いだのではないのでしょうか。

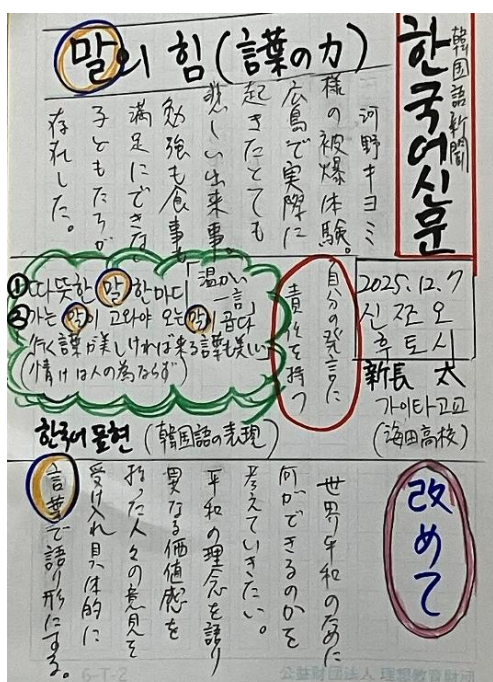
第2部 【はがき新聞の作成と交流】

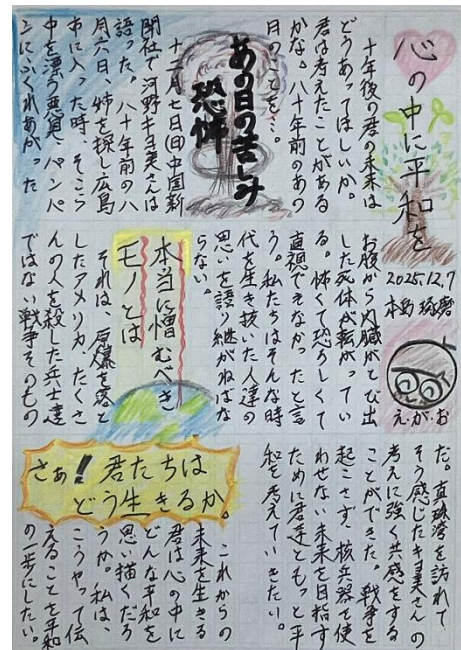
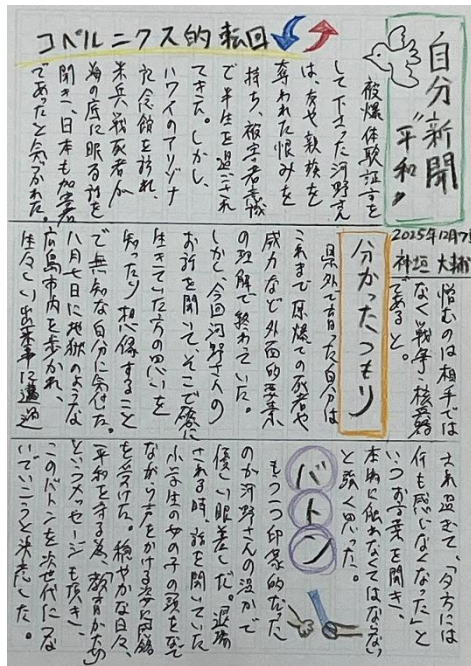
講話を聴いて、参加者は「だれに」「何を」伝えたいかという視点ではがき新聞を作成しました。

【参加者が作成した新聞名】

繋いでいこうこの「思い」 原爆を知る。そして伝える。 これから 平和新聞
核の未来は私たちが決める 灯新聞 ヒロシマのこと あの日を忘れてはいけない
平和新聞 HIROSIMA PEACE MESSAGE 私にできることは 繋ぐ
ヒロシマの心をつなぐ 河野キヨ美さんの講話から 灯新聞 平和な未来 体験をつなぐ
心の中に平和を ヒロシマをくり返さない ピースレポート ピース新聞 韓国語新聞
被爆体験者の願い 自分新聞《平和》 平和新聞 あの日を知る 「私」の思い
架け橋新聞 平和のとりで新聞～三人の孫へ～

【参加者が作成した新聞の一部】





【編集後記】

12月8日の深夜、青森県沖で大きな地震が発生し、北海道や岩手県など近隣に津波警報が出た。「すぐに高いところへ逃げてください」。テレビから各局のアナウンサーが強い口調で呼びかけ続けた。

その背景には、異常事態に遭遇しても「たいしたことはない」「自分は大丈夫」と思い込み、冷静でいようとする人間の心理がある。「正常性バイアス」といい、避難の遅れや被害の拡大につながる原因になる場合がある。

あの時の広島もそうだったのかもしれない。被爆体験伝承者の河野キヨ美さんは「あちこち空襲される中、広島に空襲がないのを不思議に思っていた」と振り返る。

「広島から多くの人がアメリカに働きに行っているから、広島は大丈夫よ」。そんな大人たちの話を半信半疑で聞いていた。

アメリカは早くから原爆を落とす計画を進めていた。威力を調べるため、広島を含めていくつか候補地を決め、その町は手つかずにしていただけた。「私たちはそれを知らなかった」

広島・長崎の原爆投下以降、非人道的な兵器として「核のタブー」が維持されてきた。だが、ウクライナに侵攻したロシアは核兵器の使用をちらつかせた。

河野さんは被爆国日本には核兵器廃絶の義務があると語る。そのためにも「一人一人が心のうちに平和の灯を灯し、戦争は絶対にだめだと思い続けてほしい」

私たちは「もう核兵器は使われないだろう」と思い込んでいないか。そんな「正常性バイアス」に落ち込まないように、河野さんの言葉を胸に刻んでいたい。

(事務局)